



発行責任者: 歯学部長 榎 宏太郎, 編集責任者: 広報委員長 中村 雅典
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>



歯科病院における新型コロナウイルスへの対応

歯科病院病院長 馬場 一美

2019年秋、我が国は、初のラグビーワールドカップを成功裏に終えた満足感と、二度目の開催となる東京オリンピック・パラリンピックへ期待に満ち溢れていた。中国武漢市を発端とした新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが世界中で猛威を奮うことなど知る由もなく。

新型コロナウイルスは、2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎患者から検出された新種のコロナウイルスである。2月11日に世界保健機関はこの新型コロナウイルス感染症の正式名称を“COVID-19 (coronavirus disease 2019)”と定めた。COVID-19は武漢市で猛威を奮った後、イタリアを中心としたヨーロッパ各国、米国でも流行し、世界各国において多くの感染者、死亡者が報告されている。わが国でも1月以来、感染者が増え始め2020年4月8日には非常事態宣言が発令された。

歯科病院では1月28日に最初の臨時院内感染予防対策委員会(委員長、代田達夫教授)を開催し、早い段階から同委員会、感染対策本部(管理会議)、感染対策ワーキンググループ(座長、鈴木規元教授)を中心に対応してきた。4月の段階で東京都内での感染拡大状況、歯科医療のリスクレベル、PPE(Persona Protective Equipment)の不足等を鑑み、外来・入院とも患者の受け入れを制限するという苦渋の決断をせざるを得ない状況となり、4月7日から診療縮小体制をとった。

それと同時に、緊急事態宣言解除後に速やかに診療体制を元に戻すための準備に着手した。大きくは、1)患者のスクリーニング、2)診療に伴う感染防止、3)職員の健康管理とモニタリング強化、4)日常生活での感染予防を軸とし、全来院患者の検温と問診、全手術患者を対象としたPCR・胸部レントゲンの実施、治療リスクに応じたトリアージ、PPE や口腔外バキュームのなど感染防止のためのハードウェアの調達、講習会(WEB)による職員教育、全職員を対象とした検温と質問票を用いた毎日の健康状態モニタリング、マスク着用、手洗い、ソーシャル・ディスタンスの確保、職場以外での生活習慣・遵守事項の共有・徹底、感染者が出た場合の対応フローチャートの構築など、

病院をあげて取り組んだ。こうした準備を整え非常事態宣言が解除された5月25日から診療体制を徐々に元に戻し、6月1日には通常診療を再開した(写真: 歯科病院における診療風景)。その後、診療実績も7月からは前年同レベルにまでもどり現在に至っている。幸いにしてこれまで院内感染はないが、第三波が押し寄せる



中、11月20日には市中感染と考えられる職員の感染を経験した。本件については、事前に準備された対応フローにしたがって、関係各位が迅速かつ適切に対応し、感染拡大を食い止めることができた。

当初より、唾液中から多くのウイルスが検出されることや、エアタービンを用いた歯質の削合、超音波スケーリング、顎骨切除やインプラント埋入手術などがエアロゾルを伴うことから、歯科治療に伴う感染リスクが指摘され、歯科治療全般を危険視する風潮もあった。一部、エビデンスに基づかない風評被害的な側面もあったが、コロナ禍にあってこそ、こうした受診者の不安を払拭し地域歯科医療に貢献するために、学術論文やガイドラインを参照しながら、担当委員会、ワーキンググループを中心として議論を重ね、上記の対応を講じてきた。

こうした活動を通して、当歯科病院ではコロナ禍以前と比較して格段に高いレベルでの感染対策システムが構築され、間違いなく全職員の感染予防に対する意識も大きく変化した。今回の経験を糧として、患者が安心して受診できる感染に強い歯科病院として生まれ変わることができたことは、歯科病院の将来にプラスとなると信じている。800人近い来院患者のある当病院はコロナ騒動が収まったとしても高いレベルでの感染対策システムを堅持し、感染対策のために今後もコストと手間をかけてゆくつもりである。

米国では感染者数が連日、10万人を超え、東京でも米国ほどではないにしろ、非常事態宣言時を超える患者数が連日報告されている。わが国のみならず世界中が第三波に飲み込まれ、COVID-19との戦いの先は見えないが、ワクチンの開発など朗報も聞こえてきている。何とかこのパンデミックを皆で力を合わせてのりきり、災い転じて福としたいものである。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う新たな初年次教育への挑戦

富士吉田教育部 教育推進室 前田 昌子

2019年末に始まったCOVID-19。カリキュラムを考えていたころにはこのような世の中になっているとは想像もできず、2月末ごろからの感染拡大に伴い入学式、入寮は可能なのか、そして授業はできるのだろうか…刻々と伝わってくる情報に頭を悩ます日々が続きました。4月になり入寮は5月連休明けまで一旦延期(その後、前期の入寮はなく、8月末からの僅か2か月間、希望者のみの寮生活になりました)、指導担当の学生とはメールで連絡、顔も知らないまま文字だけの交流が続きました。世界中が悩んでいたように、接触を避けながらどのように学修を進めていくか、GoogleClassroom を使って配信をしよう。入寮や勉強の質問を集約したまとめサイトを立ち上げよう…すべてが手探りで、突貫工事の毎日でした。

連休明けからは正規の授業が始まり、座学の授業は動画を配信することで一方通行ながら進めました。教員としては顔色を見ながらの説明が出来なくなった歯がゆさはありましたが、良い面も多数ありました。出席課題に自由記述を付けるとたくさんの質問や感想、要望など対面では聞けない生の声が返ってきました。1か月半学修が止まってしまった学生達にとって遠隔とは言え大学生として授業が受けられる喜びが伝わり、苦手な科目は動画を何度も聞き直し努力してくれていました。優秀な学生はどんどん飛ばして進められるので効率的な学修もできているようです。ただし、1年生に限っては相談ができる同級生がいない孤独な日々が続いたようです。

一方、歯学部専門科目である「歯学入門」が問題になりました。この科目はそれぞれテーマに合わせ、年間10本のレポート提出、さらにそのうち1本は与えられたテーマで発表をします。同級生約100人の前で発表する緊張感やプレゼンテーション能力、正しい情報収集能力を培うものでしたが、プレゼンをどうやって行うのが問題になりました。前期は各家庭で発表の動画を撮って送ってもらうことにし、最初に発表する学生達からの提出を待ちました。こちらの心配をよそに学生から送られてきた動画は見事なものでした。さすが現代っ子達！スマホで動画を取ることはお手の物、カメラの前で話すことも難くなくなっていました。9月に入寮した後も寮内で動画の撮影をしてもら

い、背景に富士急ハイランドの観覧車を入れ込んだり、発表以外にも工夫をしてくれました。



年明けには遠隔で定期試験が行われます。1年生にとっては初めての定期試験が遠隔で不安な事もあると思いますが、出題者は出題方法に頭を悩ませているところ



です。コロナ禍、寮という特殊な環境での初年次教育は苦労の連続でしたが、学生達のひたむきな努力のおかげで何とか1年の講義が終えられそうです。そして我々は新しい教育ツールを持つことができ、今後その使い方は無限に広がると確信した大変革の一年となっています。

インフルエンザワクチン接種について

総合内科学部門 木庭 新治

季節性インフルエンザはインフルエンザウイルスを病原とする気道感染症で、一般のかぜ症候群と比べ、38℃以上の発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、全身倦怠感などの症状が急速に現れ、免疫力の低下している人では重症化する危険性が高い疾患です。例年12月～3月が流行シーズンです。

インフルエンザワクチンは、毎年流行することが予想されるインフルエンザウイルス A 型株2種類および B 型株 2 種類を培養して製造される不活化ワクチンです。ワクチンの予防接種は、発症をある程度抑える効果と重症化予防の効果があります。ワクチン0.5 mL の1回接種で、2回接種と同等の抗体価の上昇が得られると報告されています。現在、新型コロナウイルス感染症の第3波の流行中で、インフルエンザワクチンの需要が高まっています。

感染防止対策として、コロナ禍でのマスクの着用が普及し、外出後の手洗い、うがいも習慣化しつつあります。空気が乾燥すると気道粘膜の防御機能が低下し、インフルエンザにかかりやすくなるため、加湿器などを使って適切な湿度(50～60%)を保つことが効果的です。体の抵抗力を高めるために、十分な休養とバランスのとれた栄養摂取を心がけて下さい。

認定医・専門医取得

広報委員長 中村 雅典

日本歯周病学会 認定医

関 辰明 (歯周病学講座 兼任講師)

田中 麻友 (歯周病学講座 兼任講師)

D4全身の医療面接実習をオンラインで行いました

歯学教育推進学講座 片岡 竜太

歯学部におけるコミュニケーション教育は、口腔解剖学の野中直子准教授と地域連携歯科学のマイヤース三恵准教授を中心に、MIC(マイインフォームド Consent)代表の佐伯晴子様をはじめとする模擬患者さんのご協力を得て、D2歯科医療コミュニケーション入門、D3医療面接の基礎、D4基礎疾患を有する模擬患者との医療面接実習と、内容を徐々に臨床に近づけて段階的に実施しています。特にD4の医療面接実習は、「ヒトの病気」で学んだ基礎疾患の知識を歯科診療にどのように活かすかを考える授業でもあります。例年1グループ10名の学生がPBL室を利用して、他の学生が見ている前で、「高血圧」「不整脈」「狭心症」「糖尿病」「喘息」を有する模擬患者さんと1名ずつ9分間の医療面接を行う実習を行っています。個々の学生の実習の様子はビデオカメラで撮影録画して、電子ポートフォリオを介して配信して、自らの医療面接を映像で確認しながら振り返りを行っています。

今年度は学生のPBL室利用が禁止されている状況下で、Meet を活用してオンラインで医療面接実習を実施しました。オンライン実習の評価と指導は各教室から派遣された先生方に担当していただきました。学生は白衣を着て身だしなみを整えて自宅から参加し、模擬患者と教員はPBL室から参加して実習を行いました。歯科病院フォト系の岩野謙一郎さんには、オンラインでの音声や映像に関連して貴重なアドバイスをいただき、Meet で録画もしていただきました。本実習についてはこれから検証をしますが、一定の成果が得られたのではないかと思います。しかし、画面上の模擬患者に共感的態度が取りにくい、自宅で緊張感を持ちにくいと他の学生の医療面接を見学している学生の態度が悪い、などの問題点も明らかになりました。

今後は社会情勢に応じて、対面実習とオンライン実習の利点を活かした実習形態なども柔軟に考えていきたいと思っております。



行事予定

広報委員長 中村 雅典

12月5日(土): 第67回昭和大学学士会総会

D2, D3「研究入門」の成績優秀者の表彰を行いました

口腔生化学講座 宇山 理紗

令和元年度の「研究入門」を履修した学生は、歯学部2年生(D2)16名(現3年生)、歯学部3年生(D3)5名(現4年生)でした。今回D2からは5名、D3から1名の学生が優秀者として令和2年11月16日に表彰されました。本選択科目は、学生が9日間、基礎系の研究室で各自設定した目標に向かって研究を行うものです。履修者は実習後に報告書を提出し、その内容を基礎系の各講座・部門の教育職員が評価しました。その結果、D2は1位が清水美咲さんと鈴木智子さん、2位が伊藤唯希瑚さんと辻 大樹さん、3位が山洞寧音さんとなりました。また、D3は1位が四宮寛大さんとなりました。選ばれた学生達には、上條竜太郎学生部長の挨拶ののち、高見正道大学院歯学研究科長より表彰状を授与されました。本実習で経験した研究への興味、また習得した研究手法および研究遂行能力を是非将来にいかして頂きたいと思っております。



第二延山小学校で校外実習を行いました

小児成育歯科学講座 杉山 智美

11月6日に、第二延山小学校で歯科医師の仕事紹介の講演を行ってまいりました。例年は講演だけではなく、歯を削って治療する「歯科医師体験」の実習をしていますが、本年度はコロナの影響もあり、講演のみとなりました。今回は医師・歯科医師・薬剤師・看護師の職業紹介と、「いのちの授業」の5つの講演があり、みんな熱心に聞いたり、一生懸命メモをとったりしていました。実際に参加した小学生からは「なんで手術をする前に歯をきれいにするといいのですか?」「治療するのに緊張しませんか?」という質問や「歯って鉄より硬いよ!」「削る機械はすごく速く回転しているのだね」など講演の感想がたくさんあげられました。短い時間での講義でしたが、このような機会を通して口腔の健康に興味を持ってもらえたら嬉しいです。



歯科基礎医学会学術大会モリタ優秀発表賞を受賞しました

口腔外科学講座 頌彦(瀧本) 玲子

この度、第62回歯科基礎医学会学術大会において「ゾレドロン酸による末梢血単球の破骨細胞分化抑制」という演題で発表しモリタ優秀発表賞を受賞しました。このような名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。

窒素含有型ビスホスホネート製剤(N-BP製剤)は、骨に特異的に分布し、破骨細胞の機能阻害による骨吸収抑制を起こします。一方、N-BP製剤を投与すると、一過性に発熱などの急性期反応が生じることが知られており、血液中の細胞を介した炎症反応が示唆されますが、BP製剤の最初の曝露部位である血液中での作用については詳細が明らかになっていません。そこで今回、我々はN-BP製剤の一種であるゾレドロン酸(ZOL)のヒト末梢血単核細胞(PBMCs)に対する作用を解析しました。ZOLで刺激したPBMCsにおいて、多数の骨代謝関連遺伝子が発動することが明らかになり、中でも、CD14⁺細胞において、破骨細胞分化抑制性の転写因子 IRF8の発現がZOLにより誘導されることを発見しました。単球・マクロファージは破骨細胞の前駆細胞であることから、PBMCs存在下にCD14⁺細胞をZOLで処理したところ、CD14⁺細胞のRANKL依存的な破骨細胞への分化が抑制されました。興味深いことに、PBMCsから γ δ T細胞を除去すると、ZOLによる破骨細胞分化抑制は減弱しました。これらの結果は、ZOLは、破骨細胞の機能抑制だけではなく、単球・マクロファージから破骨細胞への分化も制御することを示唆しています。本研究は、ZOLの新たな作用機序の解明につながるものと期待しております。

本学会での発表は新型コロナウイルスの影響によりWeb開催となり今までとは異なる形式での発表となりましたが、先生方にご指導頂き大変有意義な経験をさせていただきました。今後も、より一層歯学研究に精進していきたいと考えております。最後になりましたが、ご指導をいただきました口腔生化学講座の上條竜太郎教授、宮本洋一准教授、口腔外科学講座の代田達夫教授をはじめ、多くの先生にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

受賞

広報委員長 中村 雅典

第68回 JADR 総会・学術大会

・Joseph Lister 賞 根岸 宗一郎(歯学部 5年)

スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム日本大会に参加しました

歯学部5年 根岸 宗一郎

この度、私は令和2年度スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム(SCRP)日本大会にて、昭和大学歯学部代表として「トレハロースによる破骨細胞形成の抑制」について発表しました。本大会は、全国歯学部の学部学生の研究発表の場であり、例年は日本歯科医師会館で各



校代表が集まりポスター発表(英語)形式で行われますが、今年度は世界的なCOVID-19の流行とその感染拡大を防止するため、英語によるプレゼンテーションを録画した発表ビデオで一次審査が行われました。私は4年次からマルチドクターとして口腔生化学講座に所属し、実験にはある程度参加してきましたが、自分の研究結果を発表する機会は初めてのことで、スライドの作成、英文原稿の準備、プレゼンテーションの録画などは難しく、非常に苦勞しました。研究室の先生方には大変ご迷惑をおかけしましたが、多くの先生のサポートのおかげでとても楽しく研究と発表準備に臨むことができ、本当に貴重な経験となりました。今回は例年のようなポスター発表とは異なり、オンラインでの発表だったので、当日の会場程ではありませんでしたが、それでも収録の時は緊張しました。また、他大学の代表の方の発表を聞き、交流を持つことができなかつたのは少し残念でした。私が全体を通して一番大変だと感じたのは、やはり英語での研究発表という点で、英語の発音や読むスピード、自然科学分野独特の言い回しなどを会得するのに苦戦し、自分の力不足を痛感したと同時に、英語を話す力の重要性を再認識することができました。残念ながら入賞は叶いませんでしたが、今後も研究活動を続け、この経験を活かして根気強く頑張っていきたいと思えます。最後に、今回の研究発表に対しご指導を賜りました口腔生化学講座の上條先生、宮本先生、山田先生、吉村先生、笹先生そして国際交流センターの橋本先生、マイヤース先生に心より感謝申し上げます。

編集後記 口腔微生物学講座 深町 はるか

コロナ禍での歯科病院と富士吉田教育部での取り組み、また例年とは異なる実習風景をご寄稿いただき、昭和大学の新たな教育をお伝えした号となりました。貴重なご寄稿をくださいました先生方に厚く御礼申し上げます。COVID-19の第3波が到来しています、今一度、マスク着用、換気、手洗い、3密の回避など感染予防対策の徹底をお願いいたします。